

# 上杉氏領国下における曹洞宗の展開

——越後国を中心として——

遠藤 廣昭

はじめに

越後国における曹洞宗の展開については、田浪龍之氏、竹内道雄氏の研究がある<sup>(1)</sup>。しかし、これらの研究は同国内における曹洞宗教団の寺院建立史を概観したものに留まっており、竹内氏が言われる通り、越後の全体史を背景に特に教団の外護者及び他宗派教団との関連を考察することが必要である。

本稿では先学の研究業績を基礎に置き、また、述べられたことに留意しながら、曹洞宗の展開を支配者層との関係からみていくことにしたい。

## 一 曹洞宗各派展開の概要

越後への曹洞宗の展開は、文和二年（一三五三）源翁心昭が慈眼寺（西蒲原郡弥彦村）を開創することに始まり、その後、無著妙融が応安六年（一三七三）光徳寺（所在不明）を、大徹宗令が至徳三年（一三八六）悦翁寺（上越市）、明德元年（一三九〇）無等良雄が正統寺（北蒲原郡黒川村）をそれぞれ開創するが、その後の展開の主流になるには至らなかったの

る。しかし、応永元年（一三九四）傑堂能勝によって耕雲寺（村上市）が開創されると、ここを拠点として太原派の展開が行われる。即ち、同一〇年（一四〇三）虚廓長清の慈光寺（中蒲原郡村松町）、同二七年（一四二〇）顕窓慶字の雲洞庵（南魚沼郡塩沢町）、文安三年（一四四六）南英謙宗の種月寺（西蒲原郡岩室村）が開創されると、「越後四箇の道場」と呼ばれるに至り、太原派は越後の北部から中部にかけて展開し、その主流の位置を占めるのである。

これに対して、通幻派の越後への展開は、越前宝円寺系の普濟善救の法弟高巖理柏が応永一五年（一四〇八）長福寺（中魚沼郡川西町）、同年中に龍伝恵金が香積寺（柏崎市西本町）をそれぞれ開創することに始まる。

次いで、相模最乗寺開山了庵慧明の了庵系の展開が続く。下野瑞光寺法山謙正が文安元年（一四四四）林泉庵（北魚沼郡小出町）を、上野竜華院天巽慶順が同四年（一四四七）安樂寺（長岡市）、公器憲章が寛正四年（一四六三）曹源寺（栃尾市北荷頃）、天巽の法弟陸奥長祿寺開山月窓明潭が応仁二年（一四六八）観音寺（安田市草水）を、下野大中寺開山快庵妙慶が応仁元年（一四六七）顕聖寺（東頸城郡浦川原村）、次に、天真系の丹波円通寺五世雷庵性隆は長祿二年（一四五八）転輪寺（中頸城郡吉川町）、常陸金竜寺四世然芝等忻は文明六年（一四七四）興泉寺（五泉市錦町）を開創している。<sup>2)</sup>

以上、越後曹洞宗の初期的展開を概観してきたが、大きく分ければ太原派と通幻派の二派に分けられ、地域的には太原派が越後の北部から中部にかけて展開を遂げ、通幻派は少し遅れて中部から南部にかけて展開を果たしたといえるのである。この後、これらの中心寺院を拠点としてその近隣に教線を拡大して行くのである。

## 二 守護上杉氏と曹洞宗

越後守護上杉氏が、領国内の曹洞宗寺院に庇護を加えた史料は、若干の安堵状が残されているのみであり、その実態を明確にすることは難しい。しかし、塩沢の雲洞庵は応永二七年守護上杉氏と関係の深い関東管領上杉憲実によって開創されてい

る。<sup>(3)</sup> 岩室の種月寺は文安三年上杉房朝の命により南英謙宗が開創している。<sup>(4)</sup> また、村上耕雲寺には、明応五年（一四九六）上杉房能の寺領安堵状が出されているのである。<sup>(5)</sup> こうしてみると守護上杉氏と曹洞宗との関係は全く無かったわけではないようである。

前述した寺院はいずれも太原派傑堂系で越後においては曹洞宗展開当初に建立された寺院である。守護上杉氏と太原派傑堂系寺院との関係から考察を進めてみたい。

太原派傑堂系の中心寺院は村上市門前の耕雲寺である。耕雲寺は応永元年傑堂能勝により開創されるのであるが、開創時の外護者は明らかではない。しかし、応永二六年（一四一九）には「黒田なち名のうち堂地一貫文」が「沙弥道讚」により寄進されるなど、<sup>(6)</sup> 近隣の土豪層の外護を受けるに至っている。

この後の耕雲寺の動向を「耕雲種月開基年譜私録」によってみれば、<sup>(7)</sup> 応永三四年（一四二七）傑堂能勝が耕雲寺において寂すと顕窓慶字が住持となるのであるが、慶字に対し「大衆或帰伏或不旧同參傲慢之輩多矣」と言う状態であった。そして、永享元年（一四二九）二月には「耕雲寺莊盡被地民押領既為耗虚矣」と耕雲寺の寺領は地民に押領されてしまうと言う事態が起ったのである。これに対して、「備之牛頭山」に居た南英謙宗は急ぎ耕雲寺に帰り顕窓と共に耕雲寺の復興に勤めるのであるが、寺領は元に還らず住持顕窓慶字は塩沢の雲洞庵に去り耕雲寺は一時荒廃をよぎなくされるのである。しかし、この寺領も同二年（一四三〇）三月、「寺莊半分復旧、蓋州牧之成敗、亦是地民屈服也」と守護上杉房朝の介入によって寺領の半分が元に戻っているのである。翌三年（一四三一）には顕窓は耕雲寺に再住するが、翌四年（一四三二）七月、「託州牧之命而督其所残之寺莊、地民不従命、復盡押領、寺家重而為耗虚矣」と耕雲寺は「為耗虚矣」の状態になるのである。

この後、耕雲寺寺領問題は、永享二年色部朝長が耕雲寺へ寄進した寺領を同六年（一四三四）重長が再寄進していることなどをみると、<sup>(8)</sup> ほぼ同時期には治まっていると考えられるのである。

応永末年の越後は「一国及大乱」と称せられた内乱の時期であり、府中と阿賀北は対立関係にあった。しかし、守護上杉氏

はこの大乱を契機として、越後領国内の国人層を掌握し守護支配を浸透させて行く時期でもある。この結果、これまで守護権力にたいして半独立的な位置を保っていた阿賀北の国人層の中に、上杉氏の被官に成るものが現れるなど、阿賀北国人層への支配権伸張が顕著になるのである。<sup>9)</sup>

耕雲寺寺領に対する上杉房朝の「成敗」は、寺領の直接の回復に關与するとともに、当時色部氏等阿賀北国人層の寺領寄進が集中する耕雲寺の寺領問題に介入することによって、これを取り巻く阿賀北国人層への守護支配の伸張を試みたものとも考えられよう。

この後耕雲寺に住した南英謙宗は、この時生じた關係からか、文安三年上杉房朝の命によって岩室に種月寺を開創するのである。

しかし、守護上杉氏が領国支配を確固たるべきものにせんとする時期に展開を遂げる曹洞宗寺院が少なくないのにもかかわらず、越後北部の傑堂系の寺院との關係しかみることができないのはなぜであろうか。

まず、臨濟宗との關係をみなくてはなるまい。

長享二年（一四八八）当時南禅寺僧横川景三と並ぶ詩文の大家である万里集九が越後を訪れるが、その著書「梅花無尽蔵」に「越之後州有至徳・雲門・安国ノ三大刹」と記しているように、<sup>10)</sup>越後府中には守護上杉氏の庇護をうけて臨濟宗の大刹が存在していたのである。また、室町幕府は康永元年（一三四二）五山十刹を定めると、越後においても普濟寺（長岡市栖吉町）が応永一五年（一四〇八）以前に諸山に、米山寺（中頸城郡柿崎町）が応永一六年（一四〇九）以前に諸山、永享九年（一四三七）以前に十刹に列せられている。また、至徳寺（現廢寺）は延徳三年（一四九一）以前に諸山、明応八年（一四九九）に十刹、広徳寺は寛正四年（一四六三）以前に十刹に列せられている。<sup>11)</sup>

そして、これら越後府中の官寺と守護上杉氏との關係は切り放せないものがあつたのである。即ち、普濟寺は守護上杉氏の「御祈願所」として「祇樹院殿」「常春院殿」より寺領の寄進をうけていた。<sup>12)</sup>また、守護上杉憲将の子といわれる久庵開山の

至徳寺には、長松院・最勝院が塔頭としてある。<sup>(13)</sup> 守護上杉氏は在京守護で有ったがために、京都で死亡しており越後に葬地は無いのであるが、長松院は明応三年（一四九四）一〇月一七日に卒した上杉房定の法名であることから、<sup>(14)</sup> 至徳寺は守護上杉氏の越後での菩提寺の役目ももっていたと考えられるのである。また、「梅花無尽蔵」によれば、府中に円通寺と言う臨済宗寺院の存在が知られるのであるが、僧岳英は、上杉房定の命により京に遣わされ、文明一四年（一四八二）幕府と古河公方を和解させる使僧の役割を果たしているのである。<sup>(15)</sup> さらに、岳英を始めとして至徳寺・安国寺の住僧は京都の臨済僧との交わりが深く、書道・詩歌をも兼ね備えており、守護上杉氏の禅的修養を満足せしめたのである。

このように、越後府中に存在する臨済宗寺院は守護上杉氏の祈願寺・菩提寺の機能をもつとともに、政治的にも通じる禅僧を輩出させ、また、禅的修養を満足させるものとしても充分であったのである。特に、京都との関係を重要視する守護上杉氏にとって臨済僧の働きは必要かくべからざるものであった。

ここに、多くの曹洞宗寺院が展開しておりながらも、対京都関係を重要視する上杉氏をして曹洞宗寺院庇護に走らせなかった要因があるように思えるのである。

## 二 長尾上杉氏と曹洞宗

明応六年（一四九七）越後守護代長尾能景は、父重景菩提のために上野白井双林寺の曇英慧応を請じ、菩提寺林泉寺を建立し曹洞宗庇護を明確とする。<sup>(16)</sup>

長尾氏は、守護上杉氏越後入部と共に、郡司として越後各郡に配置されるが、宗家である府中長尾氏は守護代として守護上杉氏の領国経営をいわば代行してきたのであった。しかし、守護上杉房能は明応七年（一四九八）「郡司不入権否定」の政策によって領国経営の再編成を計ってくる。<sup>(17)</sup> これに対して、「七郡御代官」と称する守護代能景は、事実上この政策を無効とす

ることによって、越後国内における確固たる地位を政治的に獲得していったのである。またこの頃から守護代長尾氏の力は国人層にも及ぶようになってくるのである。<sup>(18)</sup>

このような時期に、守護代長尾能景にとり、府中に近い春日山に父重景の法要を営み、菩提寺として林泉寺を開創し、当時、北関東を中心に活動を続ける曹洞宗の代表人物である曇英によって開堂仏事を行ったことは守護代能景にとって、守護権力の弱体化を背景に、その自立化の第一歩を示すものとなったのである。

この後、守護代長尾氏によって庇護を受けた上州双林寺の系統は、明応五年（一四九六）能景庇護を伝える吉蔵寺（小千谷市桜町）。文龜三年（一五〇三）定正院（長岡市鷲巢町）。同四年（一五〇四）には、北条毛利氏の庇護を受け普広寺が開創されるなど、長尾氏にとって、親密な関係をもつ国人（後述）に受容され、さらに、料所の集中する守護代長尾氏の勢力範囲内の交通上の重要拠点に建立をみるのである。<sup>(19)</sup>

為景・晴景時代を経て越後は上杉謙信・景勝時代となる。

謙信は、七才の頃より林泉寺七世天室光育の禅門教育を受け、また、同八世益翁宗謙は戦陣において禅要・法門を説くのみではなく、時には武談にも及んだとい<sup>(20)</sup>う。天文二二年（一五五三）上洛の折り大徳寺九一世徹岫宗九に参禅し、受戒して宗心と称するようになる。<sup>(21)</sup>このように、謙信は守護上杉氏が臨済宗僧との関係を重要視していたのにたいして、臨済宗との関係を持ち続けながらも、曹洞宗僧を陣僧や使僧に使用するのである。<sup>(22)</sup>これは、次の景勝においても大きな変化はないのである。

#### 四 国人領主と曹洞宗

竹内氏の「越後・佐渡国曹洞宗中世開創・改宗寺院概勢一覽」によれば、<sup>(23)</sup>同国に展開を遂げた曹洞宗寺院の総数は三七二カ寺で、この内二七四カ寺が戦国期から安土・桃山時代の約一〇〇年間に集中しているという。

特にこの戦国期においては、越後国内に割拠する国人・土豪層の曹洞宗寺院建立が目立ってくる時期である。

中世越後において、阿賀野川を越えた蒲原郡北部と瀬波郡は「阿賀北」と呼ばれ、この地には「阿賀北衆」と呼ばれた鎌倉以来の有力な国人層が数多く割拠していた。そして、これらの国人層は、南北朝内乱期にその勢力をおおむね保持したために、阿賀北の地は上杉氏の支配が及びにくい地域であった。<sup>(25)</sup>

これらの国人層も一五世紀後半から一六世紀にかけて曹洞宗寺院を建立するのであるが、この阿賀北衆と呼ばれる国人層は村上耕雲寺系の曹洞宗寺院を建立するのである。

まず、阿賀北衆と耕雲寺との関係から考察してみたい。

すでに耕雲寺については、越後守護上杉氏との関係で若干触れた。すなわち、応永元年傑堂能勝により村上市門前に建立される。初期の檀越については明らかにできないが、応永二六年沙弥道讚の寺領寄進以来、同地の有力国人である本庄氏・色部氏、また、本庄氏の家臣小河氏・矢羽幾氏などの寺領寄進によって耕雲寺寺領が集積されてくる。<sup>(25)</sup>

さらに、永正六年（一五〇九）の「耕雲寺領納所方田帳」によれば、<sup>(26)</sup>本庄氏・色部氏はもとより、小泉庄内の土豪層からの寺領寄進も集中するのである。

本庄房長は文安元年（一四四四）に「父母之塔」である移春庵を耕雲寺内に造営している。<sup>(27)</sup>「耕雲慈堂老衲法語」によれば「耕雲精舎」において父長時（永正六年一月二八日卒、法名綱山統公庵主）の七回忌、永正一六年（一五一九）には本庄弥次郎（法名大休隆公庵主）の一三回忌法要を営んでいる。<sup>(28)</sup>この本庄氏の庶流という鮎川氏も、藤長は鮎川信濃（法名東英春公庵主）二七回忌、父節叟忠公庵主三三回忌法要を耕雲寺において営んでいる。<sup>(29)</sup>また、色部憲長は祖母潮月貞松大姉（色部重長室）三三回忌の「浮図」造立を慈堂により行っている。<sup>(30)</sup>近隣の国人層は耕雲寺に菩提寺の機能を持たせていたのである。

展開初期は、慈光寺・雲洞庵・種月寺と比較的遠隔地に教線を伸長していた耕雲寺であったが、戦国期に入るとその教勢は阿賀北各氏の耕雲寺派寺院の建立によって一層確実なものとなってくるのである。

まず、小泉荘の国人層を見れば、本庄氏は、繁長が天文九年（一五四〇）耕雲寺一三世心宗伊を招き菩提寺長樂寺（村上市）を建立し、また、五世徳嶽宗欽が改宗した諸上寺（村上市）を永祿七年（一五六四）一三世岩室文松を招いて中興する。鮎川氏は、大永七年（一五二七）八世固剛宗巖を招き、城下に菩提寺普濟寺（朝日村大場沢）を建立している。平林城主色部長真は天文元年（一五三二）一〇世大沖玄甫を招き菩提寺千眼寺（神林村平林）を建立する。<sup>(31)</sup>

奥山荘を支配した三浦和田一族の中条・黒川氏の内、中条氏は天真系の大輪寺（中条町）を菩提寺とするが、黒川為実は嘉吉元年（一四四一）三世南英謙宗を招いて高德寺（黒川村）を建立する。<sup>(32)</sup>

加地荘の加地春綱は永正六年（一五〇九）八世固剛宗巖を招き香伝寺（新発田市）を建立する。その庶流竹俣清忠は文明二年（一四七〇）五世徳嶽宗欽を招いて菩提寺宝積寺（新発田市）を建立している。<sup>(33)</sup>

白河荘にいた大見氏流の安田・水原氏の内、安田氏は了庵系の頼勝寺（安田町保田）を菩提寺とするが、水原氏は文明九年（一四七七）六世大庵梵守を招いて華報寺（笹神村出湯村）を曹洞宗に改めている。<sup>(34)</sup>

このように、阿賀北はその地域自体も、すでに述べたように越後全体から見ると特異な地域であるとともに、曹洞宗の展開からみても耕雲寺系が国人層の殆どに受容され他を寄せつけない状況になっているのである。阿賀北に割拠する国人層は、加地荘の加地氏と竹俣氏との例を見るように、庶流である国人が総領家よりも早く曹洞宗を受容していることも多く、これらも庶子家の独自性を読み取ることができる。また、これらの独自性をもった国人層の割拠が、この地域における耕雲寺系寺院の展開の大きな要因になったものと考えられる。また耕雲寺の存在する小泉荘を見れば、国人層の耕雲寺系寺院の建立は、他の国人層にくらべてかなり遅い事が分かる。これは慈堂の法語などをみても分かるように、かなり後まで法要などを耕雲寺で行なっている。これなどから考えれば、耕雲寺はかなり後まで小泉荘の寺院としても国人・土豪層に意識される寺院であったのである。

次に、府中に近い刈羽の国人越後毛利氏に付いてみてみたい。毛利氏は鎌倉時代の初めに刈羽佐橋荘の地頭職を得て入部し

てくる。室町期に入ると隣りの鵜河荘安田条の地頭職を得て佐橋・鵜河両荘を勢力下におさめてくる。憲広は嫡子元豊に佐橋荘を、次子憲朝に鵜河荘安田条を譲った。この後、総領家は北条に住して北条氏と称し、憲朝の子孫は安田に住して安田氏と称して、それぞれに所領支配を押し進めて行くのである。<sup>(35)</sup>

この、佐橋荘・鵜河荘は時衆の活動の盛んな地であった。佐橋荘地頭毛利丹後は他阿真教の教化を受け永仁元年（一二九三）専称寺（柏崎市北条）を建立し、菩提寺として代々庇護するのである。また、同市矢田には同六年（一二九八）真教が開いたと言う専念寺があり、北条高広・景広より安堵状を得ている。「往古（時衆）過去帳」によれば、越後関係者約一三〇人中、刈羽郡は戦国期まで七三人とずば抜けて多く時衆の盛んな地域であったことが分かるのである。<sup>(36)</sup>

しかし、この刈羽の地に禅宗が浸透してくるのも案外早いのである。文明一〇年（一四七八）安田城に接する山林の所有問題で安田氏三代重広と論争する不退寺は北条時頼の建立と伝え、<sup>(37)</sup>安田に隣接する吉井の清月寺は今は曹洞宗であるが「曆仁元戊年鎌倉建長寺ノ開山仏印大光禪師ノ開基ト云」と以前は臨濟宗であった。<sup>(38)</sup>また、平井の福勝寺も鎌倉建長寺徒弟の開創と言う。<sup>(39)</sup>

安田氏初代憲朝には六人の子供がいたが、そのうちの二人が僧侶となっている。二人は真燈待者、得輓喝食と呼ばれていた。<sup>(40)</sup>待者・喝食は禅宗の僧侶の階層である。憲朝の頃には曹洞宗の展開は見られなかったから、真燈・得輓は臨濟宗の僧侶となつたのであろう。

このように、佐橋荘・鵜河荘は時衆の活動拠点であるとともに、かなり早くから臨濟禅の影響もすでに受けていた地域であったと考えられるのである。しかし、戦国期に入るとさきに見た時衆往生人の数が佐橋一人、矢田一人とその数は激減しており、<sup>(41)</sup>北条毛利氏が専称寺を菩提寺として維持しておりはするものの、時衆の同地域への影響はしだいに薄らいでいったものと考えられる。

北条城下に普広寺がある。寺伝によれば寛正元年（一四六〇）深沢城主村山安芸守正勝、一字を建立し、上州双林寺三世曇

英法嗣俊岳忠哲が住するが、文龜四年（一五〇四）に北条城下に移し神光山普広寺と称し、忠哲は本師曇英慧応を請じて開山としたといふ。<sup>(42)</sup>

曇英慧応は前述の如く守護代長尾氏菩提寺春日山林泉寺の開山である。当時柏崎地方には享徳三年（一四五四）齊藤氏の庇護により傑堂系の東福院（刈羽郡刈羽村赤田北方）が開創されたのを初めとして、康正元年（一四五五）柏崎に普濟系の香積寺（柏崎市西本町）、寛正六年（一四六五）了庵系の桐盛院（刈羽郡小国町桐沢）と曹洞宗の展開も目立ってくる。<sup>(43)</sup>しかし、北条氏は守護代長尾氏の庇護を受けた曇英の双林寺系の寺院を庇護するのである。これは、北条氏が守護代長尾氏と密接な關係を持ったことを意味すると考えられ、北条氏の時宗より禅宗へと言う信仰形態の推移と府中政権との關係のなかで双林寺系寺院の庇護に向かったものと考えられるのである。

この後、普広寺の教勢は佐橋荘・鵜河荘に伸張して行く。三世曇芳文誉（大永三年十一月二日寂）は石曾根帶刀菩提寺安住寺（柏崎市石曾根）を開創する。永正八年（一五一二）には北条城主北条丹後守息女（正庵妙悦大姉）開基の寿慶寺（柏崎市矢田）を開く。同一〇年（一五二三）には北条城主北条丹後守高広の母（花隠正栄大姉）の菩提寺花栄寺（柏崎市木沢）の開山となる。五世器州秀道（永禄一二年八月四日寂）は天文三年（一五三四）北条氏の一族である八石城主毛利周広開基の周広院の開山となっている。七世人安全作（天正四年八月一八日寂）は永禄五年（一五六二）南条氏祈願寺正雲寺（柏崎市南条）を開いている。<sup>(44)</sup>

これまで、鎌倉時代より越後の阿賀北各地に地頭職を得て入部し、室町・戦国時代を通して、府中政権と一線を隔してきた阿賀北国人層と、ほぼ同時期に刈羽の佐橋荘に入部したと考えられ、南北朝・室町期には佐橋荘・鵜川荘に勢力を拡大するに至る国人毛利氏への曹洞宗の展開をみてきた。

阿賀北各地の国人層は、府中政権に対して政治的にも独自性をもち、結束して事にあたりその行動は大局的には一致していた。これらの国人層の殆どが耕雲寺の末寺を菩提寺として建立することは、阿賀北国人層の政治的意図が充分に感じ取れるの

である。

また、毛利氏の場合は地理的にも越後府中に近く、府中政権に接近することによって、我が身の保全に勤めた関係から、守護代長尾氏が庇護するに至る双林寺系の教線を受け入れることとなるのである。

これらは、同じ越後国内とはいっても、その国人層の置かれた地理的・政治的状况が曹洞宗という一宗派の展開にも大きな影響を及ぼした事を示しているのである。

### 結びにかえて

以上、越後における曹洞宗の展開を特に上杉氏・国人層の動向をふまえながら概観してみた。今後は、今回触れられなかった、越後に展開する他宗派と、上杉氏・国人層の動向の中に曹洞宗の展開を位置付ける作業をしなくてはならない。また、庶民層への展開をみる必要がある。こうすることによって、越後への曹洞宗の展開がさらに鮮明になるものと考えられる。

註 (1) 田波龍之「中世越後における曹洞禅」(『頸城文化』第二九号)。竹内道雄「中世越後の禅宗教団の展開について」(『宗学研究』第二九号)。同『新潟県史』通史編2、中世、四九二頁以下。

(2) 竹内前掲論文。

(3) 「日本洞上聯燈録」(『越佐史料』二卷、八〇一頁)。

(4) 竹内道雄「南英謙宗及び傑堂能勝の伝記史料」I(『長岡工業高等専門学校研究紀要』三一一号)。

(5) 「耕雲寺文書」(『新潟県史』資料編4、中世二、六七八頁、二三四三号文書)。

(6) 「耕雲寺文書」(『郷土村上』第二〇号)。

(7) 註(4)と同。

- (8) 「古案記録草案」(『新潟県史』資料編4、中世二、五三二頁、二〇三五号文書)。
- (9) 『新潟県史』通史編2、中世、二五五頁以下。
- (10) 「梅花無尽蔵」(『越佐史料』三卷、三三五頁)。
- (11) 今枝愛真『中世禅宗史の研究』二〇二頁。
- (12) 「上杉家文書」(『新潟県史』資料編3、中世一、一〇六頁、一八六号文書)。
- (13) 「半陶藁」(『越佐史料』三、二九三頁)。
- (14) 「上杉系図」(『越佐史料』三、三八一頁)。
- (15) 「文明壬寅岳英西堂送別詩」(『越佐史料』三、二六四頁)。
- (16) 「曇英禅師語録」(『曹洞宗全書』史伝下、三〇九頁以下)。
- (17) 黒川光子「越後における戦国大名制の形成過程―特に国人層との関係を中心に―」(『日本史研究』六四号。後に『上杉氏の研究』戦国大名論集9、一九八四年、吉川弘文館所収)。
- (18) 佐藤博信「戦国大名制の形成過程―越後国の場合―」(『民衆史研究』11号。後に『上杉氏の研究』戦国大名論集9、一九八四年、吉川弘文館所収)。
- (19) 拙稿「越後における曇英恵応開創を伝える寺院について」(『宗学研究』二八号)。
- (20) 「越後頸城郡誌稿」(『越佐史料』四、七二三頁)。
- (21) 「上杉家文書」(『越佐史料』四、九六頁)。
- (22) 「北越軍記」(『越佐史料』五、三一頁)。
- (23) 竹内道雄「中世越後の禅宗教団について」(『宗学研究』二九号)。
- (24) 『新潟県史』通史編2、中世、二五五頁。
- (25) 註(6)と同。
- (26) 「耕雲寺文書」(『新潟県史』資料編4、中世二、六七九頁、二三四四号文書)。
- (27) 註(4)と同。
- (28) 『越佐史料』三、四四九頁・五一二頁。
- (29) 『同右』三、五八四頁。

- (30) 『同右』三、六二頁。
- (31)～(34) 註(23)と同。
- (35) 『新潟県史』通史編2、中世、二四六頁。
- (36) 『同右』四六六頁以下。
- (37) 「白川風土記」(『越佐叢書』一七卷、野島出版、一九八〇年、一三〇頁)。
- (38) 同右、二三九頁。
- (39) 『新潟県寺院名鑑』新潟県仏教会、一九八三年、二八四頁。
- (40) 「毛利系図」(『越佐史料』二、七一〇頁)。
- (41) 註(35)と同。
- (42)～(44) 『北条町史』六五一頁、以下。